

マダム・ド・ロングヴィルの生涯

進藤，誠一

<https://doi.org/10.15017/2332958>

出版情報：文學研究．40，pp.83-92，1950-11-10．九州文学会
バージョン：
権利関係：



マダム・ド・ロングヴィルの生涯

進 藤 誠 一

まへがき

十七世紀のフランス文学の発展に陰に陽に助力した数人の貴婦人の略傳を書きとめておきたいと思ひ、手始めにマダム・ド・ロングヴィルをとりあげた。かの女はラ・ロシュフコーの愛人として、かれの思想に大きな影響を与へているし、またかの女の晩年、ポール・ロワイヤル僧院の非運を救つた事蹟も忘れられないものである。しかしそのやうな文学史的事実よりも、かの女の波瀾重畳の生涯そのものが、驕慢と、愛慾と、野心と、悲愁と、悔恨と、懺悔とのなひまぜであつたかの女の生涯そのものが、十七世紀フランス文学の床土としての、フランス人の氣質、性向、風俗、嗜好などをわれわれに知らせてくれるところが多いであらう。

一

ロングヴィル公夫人・アンヌ＝ジュヌヴィエヴ・ド・ブルボン Anne-Geneviève de Bourbon, duchesse de Longueville の生家であるコンデ家は、十七世紀フランスの貴族階級のなかでも、もつとも著名な、もつとも高貴な

家柄である。ブルボンの名が示すやうに、その当時の王室と源を同じくしてゐる。すなはち、初代のコンデ公・ルイ・ド・ブルボン（一五三〇—一五六九）Louis I^{er} de Bourbon, prince de Condé は、ヴァンドーム公・シャルル・ド・ブルボン Charles de Bourbon, duc de Vendôme を父とし、ナヴァール王・アントワヌ・ド・ブルボン（一五一八—一五六二）Antoine de Bourbon, roi de Navarre を兄としてゐる。そしてこのアントワヌの嫡子が、ブルボン王家の初代の王・アンリ四世 Henri IV なのである。従つてコンデ家は王室の分家にあたるので、数多い貴族のなかでも特別の權威を王家から認められてゐたし、その勢力は群小貴族を圧倒するものがあつた。

ロングヴィル公夫人の父・コンデ公・アンリ・ド・ブルボン（一五八八—一六四六）Henri II de Bourbon, prince de Condé は三代目のコンデ公であつたが、一六〇九年、時の国王アンリ四世の意によつて、シャルロット・ド・モンモランシ Charlotte de Montmorency と結婚した。モンモランシ家もまた、フランスでは非常に古い、由緒の正しい家柄で、アンリ四世によつて、ブルボン家に次ぐフランス第二の名門と宣言されてゐた。かの女は非常に美貌にめぐまれてゐた。好色をもつて鳴るアンリ四世は、ある下心をもつて、若いコンデ公にかの女を娶らせたのであつた。

しかし国王のかの女に対する執心を感じたコンデ公は、妻を宮廷から遠ざけ、国王の度かさなる嚴令にもかかはらず、決してかの女を伺候させなかつた。つひにかれは、不祥事の起ることをおそれ、妻を伴つてベルジックへ逃亡した。アンリ四世は激怒して、フランドルの総督に対しコンデ公の引渡しを要求したが、この要求は拒絶された。しかしこの紛糾を慮つたコンデ公は愛する妻の保護をブリュッセル市民に託し、みずからはミラネー（イタリア）に亡命した。

一六一〇年、アンリ四世が暗殺されたのち、コンデ夫妻は相伴つてパリに帰還した。夫妻のあひだに三人の子供が生れた。一六一九年に、私たちの女主人公アンヌ・ジュヌヴィエーヴが生れた。この頃父コンデ公は、摂政マリー・ド・メディシス王太后 Marie de Médicis と不和になり、ヴァンセンヌの城に憂閑されてゐたが、公夫人もまたみずから願つて夫と牢獄の生活をともにしてゐたので、アンヌ・ジュヌヴィエーヴはヴァンセンヌ城塔の中で呱呱の声をあげたのであつた。

次はルイ・ド・ブルボン（一六二一—一六八六）Louis de Bourbon で、アンギヤン公 d'Enghien と稱し、一六四六年に、父の死とともに、そのあとを襲つてコンデ公となつた。世に「大コンデ」Le Grand Condé と呼ぶのはこの人のことである。

次はアルマン・ド・ブルボン（一六二九—一六六六）Armand de Bourbon d'Enghien 公 prince de Conti と稱した。初代のコンデ公は佝僂であつたが、その遺伝か、コンティ公も生れながらの不具者であつた。

アンヌ・ジュヌヴィエーヴ・ド・ブルボン は母の麗質をうけついで、非常な美人であつた。当時の貴族社会の習慣に従つて、非常に早くから母に伴はれて宮廷に出仕したのであるが、金髪にふちどられた、天使を想はせるやうなその顔ばせは、早くも全宮廷の讃歎のまとなつた。その頃まだ美しさを失つてゐなかつた母なるコンデ公夫人と、この若々しく、初々しい姫君との並び立つた姿は、まことに目ざましいものであつたと思はれる。

『お母様があんまりすばらしくお美しいのですもの、あたくしなんか、いつもお母様と御一緒ですし、お母様のあとから現れるのですから、誰も美しいと思つてなんかくれませんわ』

これは若いアンヌ・ジュヌヴィエーヴが母公爵夫人に言つた言葉として伝へられてゐるが、のちにあれほど嬌名と機略をうたはれたロングヴィル夫人の氣質をよくあらはしてゐる。

かの女はまた母夫人に伴はれてよく、フォーブール・サン・ジャークにあつたカルメル派の尼僧院にも参詣した。かの女の信仰には少女らしい、感傷的な色合ひもあつたにちがひないが、しかし信仰そのものは魂の奥ふかいところに根をおろしてゐたものと思はれる。實際かの女は、環境が許したならば、少女時代にカルメリート（カルメル派の尼僧）になつたかも知れないのであつた。かの女は尼僧院を訪れると、長い時間をそこで過し、尼僧たちと親しんだ。かの女が母夫人の命令で、はじめて宮廷の舞踏会に出なければならぬことになつたとき尼僧院では賛否両論があつて、重大會議が開かれたと言はれる。その結果、妥協案として、かの女は舞踏会に出てもよいが、誘惑を防ぐために、衣裳の下に、粗い毛で織つた苦行帶をつけることに決められたのであつた。

この挿話にも見られるとほり、母夫人はアンヌ・ジュヌヴィエーヴ姫があまりに信仰に深入りすることを喜ばず、社交界の魅力によつてかの女の心を俗世界につなぎとめることに意を用ひてゐたのである。實際、神を怖れ、不徳をいとふ心は貴婦人の処世上有用なものではあつたが、コンデ家の一粒種の姫君が、未婚のままで尼僧の面衣かみぎを被るなどといふことは、とうてい許されなかつたのである。

アンヌ・ジュヌヴィエーヴはまた弟のアンギヤン公といつしよに、ランブイエ侯夫人のサロンにも出入りした。フランス社交界の名物である貴婦人のサロンの嚆矢といはれるランブイエ邸 *L'Hôtel de Rambouillet* は、一六三〇年から一六四五年にかけて、その黄金時代であつた。そしてコンデ家の若殿と姫君とはこのサロンの花形であつたに

ちがひない。家庭において十分な教育をうける機会をもたなかつたこの若人たちにとつて、このサロンは実に生きた学校であつた。マレルブ Malherbe の高尚で嚴肅な詩、オノレ・デュルフェ Honoré d'Urfé の心理的な、慇懃な小説趣味、カヴァリエ・マラン cavalier Marin の洗煉されたイタリヤ趣味などが、談笑のうちに教へこまれた。ヴォワテュール Voiture の輕妙酒脱な冗談も姉弟を喜ばせたにちがひない。慇懃で、愛想のよい会話によつて機智をひけらかすこと、恋愛や哲学の問題について、繊細きわまる分析を行ひ、形而上的な議論をたたかはそのが、この人々の無二の楽しみであり、誇りであつた。少しでも生活を想はすやうな、肉体の香りのするやうな会話は、たとひそれが健全な、質実なものであつても、かれらには粗野な、卑俗なものとして輕蔑されたのである。

しかしコンデ家の姉弟にとつて、ランブイエ邸の溫柔な慰みはさう永くは続かなかつた。アンギヤン公には硝煙のたちこめる戦場がかれの武勳を待つてゐたし、姫君もまた心の進まぬ結婚、社交界の陰謀、そしてつひには恐ろしい内乱の立役者となるべき運命が待ちかまへてゐたのである。

二

アンヌ・ジュヌヴィエーヴは一六四二年にロングヴィル公アンリ Henri II, duc de Longueville と結婚した。かの女は二十三歳、公は四十七歳であつた。ロングヴィル家はヴァロワ王家から出てをり、ルイ・ドルレアン Louis d'Orléans の庶子で、「オルレアンの庶子」Le baron d'Orléans の名で知られてゐるデュノワ Dunois の子孫であるから、フランス貴族としては最も高い家柄であつたが、コンデ家とくらべれば少し見劣りのすることは争へなかつ

た。ロングヴィル公ははじめルイーズ・ド・ブルボン^{II}ソワッソン Louise de Bourbon-Soissons と結婚し、一人の女兒をもうけてゐたが、一六三七年に夫人が死去し、その後独身をつづけてゐた。女兒は後にヌムール公夫人となつたが、ロングヴィル公がアンヌ^{II}ジュヌヴィエーヴと再婚したときには、十七歳であつた。

アンヌ^{II}ジュヌヴィエーヴとしては、十七歳の娘のある四十七歳の鰥夫と結婚することは決して嬉しいことではなかつた。この縁談はまったくかの女の父コンデ公の強い意志によつたもので、かの女としては従順に父の命令に従つただけのことであつた。ロングヴィル公は家柄がよかつたばかりでなく、三十年戦争のあいだには、イタリアやドイツで武勳をあらはしてゐたし、またアンヌ・ドートリッシュの摂政時代になつてからは政治家として、外交家として、重要な任務にあたつた。コンデ公はわが家の藩屏としてこの有力な貴族を家門に加へたいと願つたのである。實際、のちにフロンドの内乱が起つたとき、ロングヴィル公はコンデ一家の人々と行動をともしたのである。

このやうな政略結婚によつて結ばれたのであるから、夫婦のなかが円満であるはずは無かつた。結婚早々一つのスキャンダルが起つて夫妻のあいだの溝を深くしたのであつた。

ロングヴィル公はアンヌ^{II}ジュヌヴィエーヴ姫と結婚した頃、一方でモンバゾン夫人といふ、当時有名な不良貴婦人とリエージュをもつてゐた。モンバゾン夫人はヴェルテュ伯 comte de Vertus の女で、モンバゾン公 duc de Montbazou の妻であつたが、いわゆるヴァンプ型の美人であつた。かの女は若いロングヴィル夫人を憎んでゐたが、ある偶然の機会をとらへて、かの女に屈辱を与へ、社交界から葬らうと企てた。ラ・ロシュフコーがその備忘録の中にこの事件のことを書いてゐるので、引用したいと思ふ。それは一六四三年の條にある。

ある日のこと、モンバゾン夫人が家に籠つてゐて、多くの貴族たちが訪問してゐた。その中にはコリニー伯 comte de Coligny もゐた。誰かが不用意に二通の手紙を落した。それは美しい筆蹟で、情熱のこもつたもので、女性の手であつた。ロングヴィル夫人を憎んでゐたモンバゾン夫人は、この機会をとらへて、かの女に意地悪をした。夫人は手紙の文章と手蹟とがロングヴィル夫人に似つかはしく見えるだらうと考へた、實際は似てもつかかつたし、かの女には何の関係もなかつたのに。夫人はボーフォール公 duc de Beaufort をかたらつて、自分の考へに同調させた。そして二人で腹を合せて、コリニーがロングヴィル夫人の手紙を遺失したのだ、その手紙によつて二人の關係が証拠だてられるのだ、といふ噂を社交界に拡める計画をたてた。モンバゾン夫人は、この噂の拡められるまへに、私にその話をした。私には即座にその結果の全貌が見えたとし、マザラン枢機官がこの事件を利用して、ボーフォール公とその友人たちのすべてに、どんな仇をすることができるといふことも、予見できたのである。私はその頃、ロングヴィル夫人とはほとんど交渉はなかつた。しかしアンギヤン公（ロングヴィル夫人の弟）には特別の眷顧をうけてゐたし、またコリニーの親友でもあつた。私はボーフォール公とモンバゾン夫人との腰黒さを知つてゐたので、かれらがロングヴィル夫人に意地悪をするをしようとしてゐるのに違ひないと思つた。私は百方手をつくして、モンバゾン夫人に、結果が恐ろしいから、手紙を私の面前で焼いて、今後このことを口にしないやうにとすすめた。かの女は私にそれを約束した、しかし、ボーフォール公がかの女の考へを変へさせてしまつた。かの女はまもなく私の忠告に従はなかつたことを後悔した。この事件はおほやけになり、コンデ家をあげて、当然のことながら、これに関心をもつた。ところで本当に手紙を失くした男といふのは私の友人であつた。かれは手紙の主

を愛してゐた。かれは問題の手紙の書き手が分らないままでは済まないだらうと思つた。何しろ、コンデ公、コンデ公夫人、ロングヴィル夫人等の人々が、手紙を公表して、筆蹟の相違によつてモンバゾン夫人の腹黒い推量を粉碎しようとのぞんでゐたのであるから。このやうな窮地に立つて、手紙を落した男は、紳士たるものがこのやうな場合に味はねばならないすべての苦しみを味はつた。かれは私にその悩みを訴へた。そしてこの窮地からかれを救ふために、あらゆる手をうつてくれと頼んだ。幸なことに私はかれの役にたつことができた。私は問題の手紙を皇后とコンデ公夫妻のところに持参した。私はランブイエ夫人 *Mme de Rambouillet* や、サブレ夫人 *Mme de Sablé* や、その他ロングヴィル夫人と特に親しい数人の婦人たちに手紙を見せた。そして眞実が十分に認められたうへで、私は手紙を皇后の御前で焼いた。かうして私は関係のある二人の人間を致命的な心配から救つたのである。ロングヴィル夫人の汚名は社交界で完全に雪がれはしたもの、モンバゾン夫人は当然の義務である公開の謝罪をまだはたしてゐなかつた。その謝罪の條件が永いこと討議され、このやうにして遅延することで感情はいよいよ激化していつた。

その頃、アンギヤン公はティオンヴィルを攻略したところであつた。公の征旅も終りを告げ、姉なるロングヴィル夫人がうけた侮辱に憤激して、パリに帰らうとしてゐた。アンギヤン公の怒りの恐ろしさ、他のどのやうな理由にもましてモンバゾン夫人を屈服させ、要求されたすべての條件を受諾させたのであつた。かの女は所定の時刻にコンデ邸を訪れ、公夫人に面会した。公夫人はその席にわざとロングヴィル夫人を立会はせなかつた。貴族界の最上層に位するすべての婦人たちがそこに参集してゐて、モンバゾン夫人が過失を謝し、宥しを乞ふために、前も

つて指定されてゐた挨拶を述べるのを陪聴した。この公開の謝罪でこの事件が完全にかたづいたわけではなかつた。ある日、皇后がルナールの料亭にコンデ公夫人を晝餐に招いてをられたとき、モンバゾン夫人が、前もつてコンデ夫人のまへに姿を見せることの許しをうけることなしに、そこへ現れた。かうした不用意な行動がコンデ公夫人を立腹させた。かの女はモンバゾン夫人の退場を要求したが、相手はそれを拒んだ。そこで皇后がかの女に退場を命じ、同時に、宮廷から追放する旨の命令をかの女に送つた。

この事件はラ・ロシュフコーが予見したとほり、マザラン枢機官の乗するところとなり、かねて枢機官に反抗の態度をとつてゐた、いはゆる「驕慢な連中」^{Les Importants}は一網打盡の処罰をうけたのである。すなはち、ボーフォール公は捕へられてヴァンセンヌに投獄され、シユヴルーズ夫人 *Mme de Chevreuse* はトゥール *Tours* に配流となり、その他一味の連中も追放に処せられた。さてこの事件には非常にロマンティックなエピソードがついてゐる。ラ・ロシュフコーの備忘録はそれを次のやうに語つてゐる。

とかくするうち、アングヤン公が歸つて来たが、上述のやうな異変が起つてをり、ロングヴィル夫人とモンバゾン夫人とのあいだに起つた事件について、ボーフォール公に対する憤懣を示さうとしても、相手が入牢中なのでそれもできなかつた。そこでアングヤン公は、この事件に加はつてゐたギーズ公 *duc de Guise* に対し、コリニーが決闘を申込むことを許したのであつた。コリニーは非力で、不器用で、そのうへ長い病氣が癒つたばかりであつた。

かれはギーズ公に挑戦する使者として、のちにフランス元帥となつたデストラード *comte d'Estrades* を選んだ。ギーズ公のはうではブリディユー *marquis de Bridieu* を介添へとした。果合ひの場所はブラース・ロワイヤール *La place Royale* と定められた。ギーズ公は劔に手をかけながらコリニーに言つた。「われわれ両家の昔の喧嘩の結末をつけよう。ギーズ家の血とコリニー家の血がどれだけ違ふか、世間にわかるだらう。」決闘は簡單にすんだ。コリニーは倒れた、そしてギーズ公は相手を辱かしめるために、相手の劔をとりあげ、自分の劔の平で相手を打つた。デストラードとブリディユーとは、どちらも深手を負ひ、ギーズ公に引きわけられた。コリニーはこのやうなすばらしい意趣がへしに、このやうな失敗を演じたことを痛恨して、その後四・五箇月で氣病みのために死んだ。